当局を責めず法務大臣に抗議を

処刑された死刑囚の遺言

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

　昨年の暮れは死刑に関係した大きなニュースがあいつぎました。12月25日、法務大臣の命令により４人の死刑囚が執行されました。翌26日には、名張毒ぶどう酒事件で冤罪を訴えている奥西勝さんの再審開始決定が覆されました。そして、30日にはイラクでフセイン元大統領に死刑執行がなされました。これらのニュースをみなさんはどのように受けとめられたでしょうか。

☆★☆

　日本では、あと数日で、十数年ぶりに死刑執行のない一年になろうとしていた12月25日、クリスマスという日に、広島拘置所、大阪拘置所で各１名、そして東京拘置所で２名の死刑の執行が行われました。東京拘置所での執行は、拘置所が建て替え中だったこともあるのでしょうか、２００１年12月27日の執行以来ストップしていたのですが、新しい刑場がついに使われたのでした。

☆★☆

　処刑された一人、藤波芳夫さんは「旅立ちを前に」と題した家族宛ての遺書を残していかれました。

　日付の欄が空いているところからすると、以前から準備をしていた遺書のようです。その中で藤波さんは、２人の命を奪ってしまった自らの罪を悔いて洗礼を受けたこと、お世話になった職員へのお礼などを綴りながら、「どうか当局には抗議をしないように申して下さい。その分法相に抗議をお願い致します」と記しています。

　この遺書には、署名・指印の後に、「法相に抗議　被告人は立つ事も出来ず一歩も歩く事が出来ず　病舎処遇だからです」という一文が書き添えられていました。藤波さんは75歳という高齢であり、身体も不自由にされていたのです（同日、やはり東拘で執行された秋山さんは77歳でした）。この部分は、執行当日に添えられたものでしょうか。その筆跡は急いで書き足したもののように見えます。歩くこともままならないお年寄りをいまさら処刑することに何の意味があったのでしょう。そもそも、執行を命じた長勢甚遠法務大臣はそのような状況を知っていたのでしょうか。

☆★☆

　１月７日、長勢法務大臣の地元である富山市において、執行に対する抗議行動が取りくまれました。集会では藤波さんの遺書の紹介等がなされ、この時期、富山では珍しいデモでは法務大臣に抗議する声が響きわたりました。地元に帰っていた大臣にもその声は聞こえたようです。そして、大臣の事務所には抗議文とともに藤波さんの遺書が届けられました。大臣は目を通してくれたでしょうか。

★☆★

　藤波さんは、職員を責めないで下さいという遺書を残されました。私たちは、死刑の執行を直接担わされる各拘置所の所長以下、職員の皆さんに対して「二度とこんな仕事はやれない！」と、共に声をあげられるよう呼びかけます。